

『法華啓運鈔』 覚え書き

渡 邊 寶 陽

一 日蓮聖人と「法華経講義」

日蓮聖人は『法華経』を依経としている。但しそれとともに、日蓮聖人は「像法の中には天台一人、法華経一切経をよめり。…像の末に伝教一人、法華経一切経を仏説のごとく読み給へり」といい、さらに聖人御自身に即しては、「法華経の六難九易を弁ふれば一切経よまざるにしたがうべし」と述べている。『法華経』の真意を明らかにすることによって、一切経の趣旨が明らかとなると考えられているからである。¹⁾ そのような主旨から、『法華経』の深意を明らかにすることが、日蓮聖人の生涯を賭けての大事業であった。したがって、その『法華経』の深意の解明は「日蓮聖人遺文」の随所に明らかにされている。

当然のことながら、日蓮聖人は若き日より「法華経」の読誦・讃仰を仏教信仰の要とされた。初期から「八日講」「法華講」などを

行っており、晩年、身延山に法華堂を建築した際には、延年の舞を奉じ、一日頓写経をもって「法華経」讃仰を行っている。²⁾

日蓮聖人の身延山晩年の法華経講義記録として『御義口伝』と『日向記』とが伝承されており、両書は『法華経』の原文に即して、日蓮法華信仰の要義を知ろうとするには肝にして要を得た指示がなされているとして、おおいに普及しているが、日蓮聖人真蹟遺文の文体とは全く異なるものであると考えられている。その存在自体を否定するものではないが、おそらく後年、門下が日蓮聖人の趣意を汲んで佛教理解の指針として諸遺文の心を汲むかたちで成立したものであろうかと推測する。³⁾

日蓮聖人御自身による貴重な文献として注目されるのは、静岡県三島市・玉沢妙法華寺所蔵の『注法華経』である。同書は春日版の「法華経」に日蓮聖人が関連する経論釈を書き入れたものである。但し、同書が秘書として秘匿されてきたという事情があり、池上本門寺第十二世・佛乘院日惺（一五五〇〜九八）が書き入れられてい

る経論釈を取り出し、その書き入れられている箇所を明示することなく編集刊行したという経緯がある。近代に入って、北尾日大が『日蓮聖人注法華経』三巻として編集・刊行している。⁴⁾

永らくの精密な検討の努力によって、「法華経」の原文に註記された経論釈の総てをそのままに再現する一書として上梓したが、山中喜八氏の労作、『日蓮聖人注法華経』である。当初、青焼きのコピーで報告され、その後そのリプリント版が本満寺の梅本正雄師によって試みられ、そうした経過の上で、法蔵館から大小の活字を駆使し、裏表に書き入れられた内容を巧みに再現した活字印刷による『日蓮聖人注法華経』として世に問われたのである。なお、山中氏には、その後、『日蓮聖人真蹟の世界』上・下巻等の著作がある。⁵⁾

これを踏まえて、関戸堯海『日蓮聖人注法華経の研究』が上梓されている。⁶⁾

周知の通り、日蓮聖人の「法華経」に拠って立つ佛教教学については、数え切れないほどの多くの研究が為されているが、「法華経講義」のスタイルによる著作は見られない。前記の『御義口伝』『日向記』が形作られていく背景には、そうしたスタイルへの要請があったものと推量することも可能であろうか。

日蓮聖人が、「法華経講義」という形式に拠らず、精神文化史・佛教史観に基づく著作や書簡による諸著を通して信徒との交流を深

めたということには、非常に深い意義があるものと推考する。

したがって、日蓮聖人滅後の暫くの時期に於いては、「御遺文注釈」という形式が主流であったようであり、「法華経講義」関係はきわめてすくない。⁷⁾

やがて、中世になると天台宗教団においても、教団組織の変化という事情があるものかとも推考されるが、「法華経講義」についても変化が現れて来るものようである。すなわち、「法華経講義」の主流を為す「天台三大部」の注釈という形式から、「法華経談義」が行われ、その内容が一書とされたり、刊行されたりしていったものようである。⁸⁾ それらの点については、筆者が追求することは出来ないが、後賢の研究に期待したいと念願するところである。

二 日蓮聖人滅後の「法華経講義」について

小著『日蓮宗信行論の研究』(昭和五十一年・平楽寺書店)巻末に「日蓮宗法華経・祖書講註書目録」を付してある。以下、それに抛りながら概観を試みたい。

六老僧についてみると、辨阿闍梨日昭(一一二一〜一三二三)「経釈秘抄要文」がある。日蓮宗初期の段階については自筆を確認できるものが少ないようで、同書もその真撰か否かの確認は困難であるが、ともあれ伝承されるところであり、小品ながら要を得た内

容である。

孫弟子にあたる大教日輪（池上本門寺第三祖、一二七二～一三五九）に「法華弘通秘聞書」の名が伝えられるが、筆者はその内容を拝見していない。

中山の日全（～一三四四）『法華問答正義抄』二十二卷は、日蓮聖人の教義内容を巧みにまとめたもので、その一卷に「法華経」の要義に関するものが収められている。同書は、中山が身延と交流と深くした宗門初期の時代の著作で、しばしば書写され、かなり重用されたものと推測される。写本が立正大学図書館にあるが、故浅井圓道教授は写誤が少なくないという印象を持ったようにも仄聞する。この頃、あるいはすこし時代が下がった頃の学匠として、青蓮日中等の名が登場する。またその点について、望月敏厚著『日蓮宗学説史』、執行海秀著『日蓮宗教学史』にふれられているが、原著を確認することが出来ず、わずかに一如日重の『見聞愚案記』をはじめ、書写本などに引用されている短文を通じて、その様相を推考するにとどまるのである。

年代的に見ると、慶林日隆（一二六五～一三三四）『法華本門弘経抄』百十三卷は、それまでの様相と一変して、膨大な著作と言えよう。同書は現在も法華宗本門流の重要書であるが、今ここではそのことを確認するにとどめたい。

久遠成日親（一四〇七～一四八八）「法華大意」一紙、金剛日与

（一四九一～一五五六）『法華和語記』四卷、『法華経抄』四卷の名が見えるが、筆者は未見である。

行学日朝（一四二二～一五〇〇）には、『補施集』一二二卷の直筆が確認されている。同『法華講演抄』三十六卷は筆者未見。『法華草案抄』十二卷は版本として流布した。なお、日朝の著作として『普賢経記』一卷、『普賢経私記』一卷、『普賢経私抄』二卷、『普賢経別記』一卷、『法華十講』十卷、『方便品記』一卷、『法華大綱集』二卷の名が挙げられている。

身延山の歴世を継承した日朝の資、日意（一四四四～一四一九）には『序品講義』一卷が伝えられ、常寂日耀（一四四五、または一四四二～一五二二）にも『序品私記』一卷が伝えられる。

常住日忠（一四三八～一五〇三）『法華直談抄』（卷数不明）、『寿量品記』（卷数不明）、『神力品御談』（卷数不明）、『似玉抄』（開迹顯本妙経直談抄）二卷の名がある。

正行日源（世没年不詳）『講演法華義抄』二十三卷は幻の書で、一如日重『見聞愚案記』にその名が見られ、一部引用も見られる。

同記によると、正行日源は教学者として盛名を得ていたようである。円明日澄（一四四一～一五二〇）『法華啓運抄』（五十五卷・版本）の名は広く知られたようで、不受不施義を主張した佛性日奥（一五六五～一六三〇）も同書について触れている。

常不輟日真（一四四四～一五二八）に「法華経科文」三卷、「開

結二卷分科」(巻数不明)。宝聚日伝(一四八二〜一五四八)に『婆品私見』一卷、『序品私記』一卷が見られる。また、慶隆日誦に『涌出品講談』三巻、『自我偈講談』五巻がある。

廣蔵日辰(一五〇八〜一五七六)は、京都の混乱の状況下で、大石寺系の上行院と住本寺とを合併して要法寺として再興した枢要な僧として知られ、大蔵経抜粋をするなど独特の思想に基づく軌跡を遺しているが、「法華経」に関しても、『序品方便品抄』一卷、『開迹顯本法華二論義得意抄』六巻、『法華訓蒙抄』三巻、『法華勉旃抄』三巻、『寿量品集解』二巻、『寿量品談義』一卷、『不軽品談義』一卷などの書名が見られる。

このように一覧してみると、「東に日朝、西に日隆」といわれる時期に、大型の「法華経講義」が非常に高まったと理解することができる⁸⁾。

三 円明日澄『法華啓運抄』の版行の背景

大局的に見れば、東に於いては、鎌倉に円明日澄あり。身延山に日朝あり。西に於いては京都に慶林日隆あり、という状況であった。前二者はいわゆる天台宗、関東系の田舎檀林において教学を撰取し、京都の日隆は比叡山からの影響があったかと想定してみたい。詳細な検証は後賢に期待することとして、関東天台との関連については、

既に広田哲通氏が身延蔵本と関東天台との関係を指摘しているところである。日隆については、筆者の印象批評となってしまうが、「チルチル常住」「サクサク常住」などの発想は、比叡山や大原の三千院の切紙相承にみる楓の青葉から紅葉に至る変化の相承などとの関連を思い起こさせるところがある⁹⁾。

それはさておき、従来、教学の問題は教学の問題として教団史的情况については、かならずしもクロスする点についての考察を避けてきたきらいがあるが、前記の広田哲通氏の研究をたどると、そこに天台宗教団の置かれた状況との関連が想定されてくる気がするのである。もしそうだとすれば、日朝(一四二二〜一五〇〇)の布教は師の一乗坊日出(一三八一〜一四五九)の東海道三島を中心とする布教を継承するものであることに留意すべきかと考える。

日澄(一四四一〜一五一〇)についても、鎌倉妙法寺で「法華経講談」を行った事の意味を考慮する必要があるであろうか。この時代の「法華経談義」については、日朝の『法華草案抄』十二巻が後に版行され、同様に日澄の『法華啓運抄』五十五巻が版行された以外は、ほとんど刊行の事実がないのは、おそらく両書の評価が高く、多くの僧によって筆写されたことを思わせるものではなからうか。江戸期になって、書肆が版行を計画するという事は、当然、採算性を想定することが一要因として考えられてよいのではなからうか。

四 『法華啓運抄』の執筆をめぐる

『法華啓運抄』五十五巻のすべてに本書執筆の経緯が記されているわけではないが、巻末に講談の年月日が記される場合と、巻初にメモのように年月が記される場合の両ケースがある。以下、気がついた年次に関する記録を挙げると次の通りである。(なお、年号の後に私に西暦年次を付した。)

①巻之二(首題見聞 下)六十三丁ウラ

御本云 文明十五年(癸卯)(一四八三)同十六年(甲辰)(一四八四)両年之間首尾四十九日於鎌倉妙法寺本堂講談之畢。其後当第二十年、文亀二年(壬戌)六月五日於妙法寺清書之、首尾十二日之間也。

日澄行年六十三

②巻之十四(方便品 六)七十三丁オモテ

此抄 延徳二年(庚戌)(一四九〇)六月類聚之。其後經十四年、文亀三年(癸亥)十一月十四日未尅、十一月十四日未尅於鎌倉妙法寺添削之、清書之畢。日澄行年六十三老眼書之。

③巻十七(譬喩品三)二十八丁オモテ

乙未孟春(一四九九)十一日暁 心静ニ無始已来輪廻ノ苦ミ無窮ナル事ヲ思統ケ サテモ万徳莊嚴ノ妙躰ヲ我身ニ持チナガラ

曠劫已来今マデ不顯之。纔ノ小利ヲ貪ル心ト是ノ如此。無尽ノ苦ヲ受事アサマシキ事、中々云モヲロカ也ト思テ、心ヲ一ニシテ善惡不二邪正一如ノ南無妙法蓮華經ト數返唱シカバ、不覺ノ涙兩眼ニ浮ヒヌ。愚暗深重ノ心中ニ是レ程慚愧ノ念生スルモ、只聖教ヲ見ル恩徳ト思シ也。今ハ或從知識世ニ絶タリ。或從經卷尤も肝心也。

末代ノ法華經ノ行者ハ 後五百ニ生タルハ時ヲ待チ得タリ。仍テ撰時抄ニ 法華經流布ノ時キ二度有ル可シ(ト)判給フ。一度ノ時ハハヤ過テ、我等ハ終ニ値ハザリシ也。

今一度ノ時ハ我等カ生タル当時 明応七年戊午也。日澄カ既ニ時ヲ待得タル者也。

等賜大車ノ縁ト者 或從知識ノ縁ハ日蓮大聖人也。

或從經卷ノ縁ト者、朝夕信ズル所ノ唱信ズル所ノ南無妙法蓮華經也。桜梅青陽ノ時ト雨露ノ縁ヲ待チ得テ、華咲ケルガ如也。

朝夕行因ノ華咲ク故ニ、終ニ未來ノ靈山ニ於テ得果ノフミ成シ事有可ラズ。仍テ朝夕ノ唱信スル当躰ハヤ大白牛車ニ乗シハジメタリ。遊於四方直至道場ハ終ニ之有ルベシ也。五品ハ教乗ト云フ釈、故ニ今ハ教条ノ分也。

④巻之二十(譬喩品六)四十二ウラ

御本云 明応八年(一四九九)己未三月十四日午刻 相州鎌倉妙法寺記之訖

円明院日澄 行年五十九歳

⑤卷之二十三(葉草諭品上) 文亀元(一五〇一) 壬戌曆 三月十日始之

⑥卷二十六(化城諭品全) 五十八紙

文亀二年(一五〇二) 壬戌三月十二日之ヲ始ム。同二十五酉尅之ヲ草案ス。

葉草諭品八月。

授記品一日。

化城諭品五月首尾十四日之間之ヲ註也。

鎌倉妙法寺住持 円明院日澄 六十二歳 二十六卷終わる。

⑦卷之三十七(安樂行品下) 三十八丁オモテ

此抄 延徳四年(一四九二) 壬子五月比、鎌倉妙法寺ニ於テ之ヲ草案ス。其後、十二年ヲ経テ、文亀三年癸亥八月二十五日未刻、妙法寺ニ於テ之ヲ添削シ、之ヲ清書シ畢。

⑧卷三十九(涌出品下) 三十六卷オモテ

御本云 此抄 延徳四年(一四九二) 五月比、鎌倉妙法寺ニ於テ之ヲ草案ス。

其ノ後、十二年ヲ経テ 文亀三年(一五〇三) 九月四日 辰刻 妙法寺ニ於テ之ヲ添削清書記。

日澄行年六十三 老眼ヲ拭テ之ヲ書ス

⑨卷四十(寿量品上) 一丁オモテ

文亀三 八 一

⑩卷四十二(寿量品下) 五十丁オモテ

此抄 延徳四年(一四九二) 壬子七月比鎌倉妙法寺ニ於テ之ヲ草案ス

其ノ後チ 十二年ヲ経テ 文亀三年(一五〇三) 癸亥八月十四

日巳刻 妙法寺ニ於テ之ヲ清書シ畢又 日澄行年六十三

⑪卷五十一(普門品上) 一丁オモテ 文亀三 七 三

⑫卷五十二(普門品下) 五十九丁オモテ

此抄 延徳四年(一四九二) 壬子九月草案之。其ノ後経十二年

文亀三(一五〇三) 癸亥七月八日巳刻於鎌倉妙法寺清書之畢。

⑬卷五十三(陀羅尼品全) 一丁オモテ 文亀三 七 十九

⑭卷五十五(普賢品全) 終わり

此三品 延徳四年(一四九二) 壬子九月比 於鎌倉妙法寺草案之畢。其ノ後、経十二年、文亀三(一五〇三) 癸亥七月二十三日巳尅於妙法寺重而清書之。四日半書之。

これらの記録によると、当初の講談の草案は文明十五年(一四八三) から同十六年(一四八四) にかけて執筆され、ほぼ十二年後の文亀二年(一五〇二) に清書されたものであることが解る。しかも、かなりのスピードで清書されたことに驚嘆するのである。

おそらく、実際に人々を前にしての講談を踏まえつつ、あらためて執筆を進めたものと想定したい。

五 『法華啓運抄』掲出の和歌をめぐる

平安貴族が「法華經」を信奉するにあたって和歌を重用し、「法華經和歌」が盛んになったことは周知の通りである。

それに対して、鎌倉佛教の祖師達は概して和歌を詠まない傾向があるようである。そのなかで、道元禪師については「傘松道詠」があり、なお真撰かどうかについての議論も有るとされるようである。

そのような鎌倉佛教の傾向に対すると、室町期の「法華經講談」に関しては、天台宗の尊舜の『法華經鷲林拾葉鈔』をはじめとして頻繁に和歌が引用される。そのことは、広田哲通氏がすでに詳細な検証をされているところである¹⁰⁾。それらを見れば、あきらかに鎌倉佛教と室町期の諸宗伝播を背景とする「法華經講談」との間に、文化的な断層が認められると推考することが許されはしないであろうか。

なお、広田哲通氏の「法華經講談」諸書にみられる和歌所引の研究と比較すると、天台系「法華經講談」で引用される和歌は、勅撰和歌集等の著名なものを厳選しているように思われる。

それに対して、日朝や日澄の場合、その引用は厳選せず、講談に適切と考えられれば自由に挙げて見ように見受けられる。いったい、そのような傾向にはどのような背景があるのであろうか。

そうした疑問を持ちながら、ともあれ以下に『法華啓運抄』のうち、序品第一に限定して、そこに挙げられる和歌を掲出してみたい。それらの分析については、後賢に期待したい。

註

- (1) 『開目抄』『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下『定本』と略称) 五五八頁、五八九頁。
- (2) 『定本』一八九四頁、一九〇六頁。
- (3) 成立についての推論は多くの先人によって語り継がれてきたところである。なお、『御義口伝』についての所論は秘蔵されてきたが、平成十八年に(七十年前の研究論文が)執行海秀著『御義口伝の研究』(山喜房佛書林刊)として出版された。
- (4) 浅井圓道稿「注法華經」『日蓮宗事典』二七三頁。
- (5) 山中喜八『日蓮聖人真蹟の世界』(雄山閣刊)。
- (6) 関戸堯海『日蓮聖人 注法華經の研究』(山喜房佛書林刊)。
- (7) 渡邊實陽『日蓮宗信行論の研究』四三四頁。『日蓮宗 法華經・祖書講註書目録』参照。
- (8) 執行海秀『日蓮宗教学史』八二頁、一一二頁等参照。
- (9) 切紙相承については、碓慈弘『日本仏教の開展とその基調』等の諸著に紹介されるところであるが、先年、大原三千院においてその一例を展観して、大きな刺激を受けた。
- (10) 広田哲通『中世法華經注釈書の研究』二二二頁。『天台檀所で法華經をよむ』。

『法華啓運抄』序品第一講談所引和歌一覽

卷一 法華ノ心

「ミワタセハスヘセキワカルタカセ川ヒトツニナリヌ五月雨ノ比」

二十六丁ウラ

「アハレモ心ニ思程ハカリ イハレヌヘクハトヒモコソセメ」

西行 五十丁ウラ

「アシカレトヲモハヌ山ノミ子ニタニ ヲフトルモノヲ人ノナケ

和泉式部 五十七丁ウラ

「埋(ムモレ) イシ苔ノ下水ヲトタテ」 岩根ヲコユル五月雨ノ

比」 六十三丁オモテ

「ワカセコガクベキヨヒナリサカニノ雲ノフルマイカ子テシル

シモ」 衣通姫 六十八丁オモテ

「一夜カス野上ノ里ノ草枕 ムスヒステケル人ノ契ヲ」定家

六十八丁ウラ

卷二

「雲ノ上ニナルヤツクミノタキノ水 ミツカラ法ノコヘキコユナ

リ」 松月 二丁ウラ

「身ヲセムルウヘノ心ニタヘカ子テ 子ヲヨモフ道ヲハスレハテ

ヌル」 後京極 十丁オモテ

「二ツナキモノトヲモヒシヲ水底ニ 山ノハナラテイツル月カケ」

十二丁ウラ

「イナセトモイヒハナタレスウキモノハ 身ヲ心トモセヌ世ナリ

ケリ」 十六丁オモテ

「ヲモウコトイハテタツトヤヤミヌヘキ 我レニヒトシキ人シナ

ケレハ」 二十八丁オモテ

「思カナサキチル色ヲナカメテモ 悟ヒラケン花ノ臺ヲ」定家

三十三丁ウラ

「ツトメテハマツソナカムル蓮葉ヲ 終ニ我身ノヤトリト思ヘハ」

三十三丁ウラ

「海モアサシ山モ跡トナシ我カ恋ヲ ナニクソソヘテ君ニイハマ

シ」 三十四丁オモテ

「人シレヌ思ヲツ子ニスルカナル フシノ山コソ吾カ身也ケレ」

三十四丁ウラ

(後撰恋部 ハチスノハイヲトリテヨミ人シラス)

「ハチスハノハヒニソ人ハオモフラン 世ニハコヒ地ノ中ニオヒ

ツ」 三十八丁オモテ

(「ハイトイフハ荷ノ根ヲイフ也。食ルニ其味ヨキ者也」)

「露ツクム池ノ蓮ノマクリハニ 衣ノ玉ヲ思シル哉」西行

三十八丁ウラ

「流れ来て近付ク水ニシルキ我先開クヘキ胸ノ蓮葉」定家

「ナヲキ木ニマカレル枝モアル物ヲ ケヲフキッスライフカワリ
ナサ」 五十一丁オモテ

「トニカクニ物ハヲモハスヒタツクミ ウツスミナハノタツ一ス
チニ」 五十一丁オモテ

「(繩墨可_レ合 古今序云 及_下彼時變_二澆漓_一人貴_三奢滛_上浮詞雲
(ノ如ク)興艶流泉(ノ如ク)涌矣 上涌泉可_レ合之)」

「霜ノタテ露ノヌキコソヨハカラン 山ノニシキノ折ハカツチル」
五十二丁オモテ

「龍田川ニシキヨリカク神無月 時雨ノアメヲタテヌキニシテ」
五十二丁オモテ

「ヒトマキニチツノ念ヲコメタレハ 人コソナケレコヘハノコレ
リ」 惠慶法師 五十四丁オモテ

「ツノ国ノナニハノ事カノリナラヌ アソヒタハフレマテトコソ
キケ」 五十八丁オモテ

「アヒミテノ後ノ心ニクラフレハ 昔ハ物ヲツモハサリケリ」
六十丁ウラ

「聞テコソイトツマタルツ時鳥 初音計ト何ニ思ケン」
六十丁ウラ

「時鳥一声トコソ思シニ マチエテカハル我コッロカナ」
六十丁ウラ

「タノモシキ君々ニマスヨリニアイテ 心ノ色ヲ筆ニソメタル」
西行 四丁ウラ

「我宿ノカキ子ヤ春ヲツケツラン 夏キニケリト見ユル卯ノ花」
八丁オモテ

「雪ノ内ハナヘテ一二成ニケリ カレ野々色モタノムカキ子モ」
定家 八丁オモテ

「ハレクモルカケヲ都ニサキタテツ 時雨トツクル山端ノ月」
八丁オモテ

「雨影ニ花ノスカタヲ先立テツ イクヘコヘキヌミ子ノ白雲」
八丁オモテ

「太山路(みやまじ)ヤイツヨリ秋ノ色ナラン ミサリシ雲ノ夕
暮ノ空」 八丁ウラ

「手ニムスフ水ニヤトレル月影ノアルカナキカノ世ニモスムカナ」
貫之 十四丁オモテ

「ツ子ナラヌ我カ身ハ水ノ月ナレヤ世ニスミトケン 夏モヲモハス」
小辨 十四丁オモテ

「風吹ハマツヤフレヌル草ノ葉ニヨソフルカラニ袖ソ露ケキ」
十四丁オモテ

「カクハカリヘカタクミユル世中ニ 浦山敷モスメル月カナ」
二十一丁ウラ

「世ニスミテハテハカクルッナライヨモ シラセカヲナル夜半ノ月哉」 二十一丁ウラ

「又ハヨモハ子ヲナラフル鳥モアラシ 上ヘミヌ鷺ノ空ノカヨヒチ」 信實 二十九丁ウラ

「サヤカナル鷺ノタカ子ノ雲井ヨリ 影ヤハラクル月ヨミノ森」 西行 二十九丁ウラ

「鷺ノ山ミノリノ庭ニチル花ヲ 吉野ノミ子ノ嵐ニソミル」 後京極 二十九丁ウラ

「鷺ノ山二度カケノウツリキテ 嵯峨野ノ空ニ有明ノ月」 寂蓮 二十九丁ウラ

「鷺ノ山有明ノ月ノメクリキテ 我立仙ノフモトニソスム」 慈鎮 二十九丁ウラ

「世中ハクタリハテヌト云フ事ヤ タマク人ノマコト成ラン」 後京極 三十丁オモテ

「カラ国ニシツミシ人モ我カ如ク 三世マテアヲヌ歎キヲソスル」 基後 三十二丁オモテ

「山里ヲ浮世ノ外ノ宿ソトハ スマテ思ヒシ心成ケリ」 三十九丁ウラ

「人ナラハマテトイハマシ時鳥 二声トタニナカテスクラン」 四十二丁オモテ

「クリ原ヤア子ハノ松ノハナラハ 都ノツトニイサトイハマシヲ」

「人トカクムマレタル身ノウレシサヲ イタツラニナス我心哉」 四十二丁オモテ

四十二丁ウラ

卷四 「序品見聞二」

「徒ニ行キテハカヘルモノユヘニ ミマクホシサニイサナハレツツ」 五丁オモテ

「思カ子今日立ソムルニシキ木ノ 千束モマタテアフヨシモカナ」 五丁ウラ

「ムラクサニクサノナハモシソナハラハ ナソシモハナノサクニサクラン」 十丁オモテ

（*「廻文ノ歌ト上下ヨリ読ルル歌也」） 「ウツストモ曇アラシトタノミコシ 鏡ノ影ノマツクラキ哉」 定家 二十三丁オモテ

「見ルタヒニ鏡ノ影ノツラキカナ カッラサリセハカッラマシヤハ」 懷圓法師 二十三丁オモテ

「極月晦日カタ二年ノ老ヌル事ヲナケキテ」 「ウハ玉ノ我黒カミ二年クレテ 鏡ノ影ニフレル白雪」 紀貫之 二十三丁オモテ

「行水ノ花ノカクミノカケモウシ アタナル色ノウツリヤスサハ」 定家 二十三丁オモテ

「行水ノ花ノカクミノカケモウシ アタナル色ノウツリヤスサハ」 定家 二十三丁オモテ

「梅カ香ヤマツウツルラン影キヨキ 玉嶋川ノ花ノカクミニ」

「鏡山イサ立ヨリテミテユカン 年ヘヌル身ハ老ヤシヌルト」

「七タハワレテ又アフカクミカト 秋ノ七日ノ月ヤミルラン」

「モクシキヤ天照神ノマス鏡 君カ御影ヲサソマモルラン」

「ワタノハラウカヘル亀ヲシルヘニテ 誰レ唐ノ文ツタエケン」

「波間ヨリ出タル亀ハ萬代ト ワカ思占ノシルシナリケリ」

「コン代マテ求キ寶ト成物ハ 佛ニミカク金ナリケリ」

「世ノウキメミヘヌ山路ヘ入ランニハ 思人コソホタシナリケレ」

「世ノ中ハウキ身ニソエルカゲナレヤ思ヒ捨レトハナレサリケリ」

「柴ノ庵ニ身ヲハ心ノサソヒキテ 心ハ身ニモソハヌナリケリ」

「朝日サスヲサッカ上ノ露ヨリモ アナタノミカタ人ノ心ハ」

「朝露ハキエノコリテモアリヌヘシ誰カ此世ヲタノミハツヘキ」

「露ヲナトアタナル物ト思ヒケン 我身モ草ニヲカヌハカリヲ」

「草ノ葉ニヲカヌ計ノ露ノ身ハイツソノカスニイラントスラン」

「玉ノヲノナカキタメシニ引人モキユレハ露ニコトナラヌカナ」

「ヤマイシテ人ヲホイナクナリシ年ナキ人ヲ野ハラヤフナト

「ミナ人ノ命ヲ露ニタトフレハ 草ムラコトニヨケルナリケリ」

「木ノ下ヲ栖トスレハヲツカラ 花ミル人ニ成ニケル哉」

「世ノ中ハトテモカクテモヲナシ事宮モワラ屋モハテシナケレハ」

「今ハ我レ松ノ柱ヤ杉ノ庵ニ トツヘキモノヲコケフカキ門」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「山里ヨ心ノヲクノ浅クテハ 住ヘクモナキ処ナリケリ」

「カクコセンモノトハ我モ思ニキ 心ノウラソマサシカリケル」

四十丁オモテ

(是ハ三世ヲ読ル也)

「ハカナクモ明日ノ命ヲタノム哉 昨日モスキシ心ナラヒニ」

十一丁オモテ

(此躰ノ事也)

卷五 「序品見聞」(第三)

「大原ヤヲシホノ山モ今日コソハ 神代ノムカシ思ヒ出ラン」

二丁オモテ

「思ヒシル人モナキ世ニ桜花 何トアタナル色ヲ見スラン」

花山院 三丁オモテ

「色香ヲハ思ヒモイレヌ桜花 常ナラヌ世ニヨソヘテソミル」

三丁オモテ

「カタリテモナニヨカタマノキテモミン カラハホノヲト成ニシ

モノヲ」 十丁ウラ

「アスシラヌ我身ト思ヘトクレヌマノ今日ハ人コソ悲シカリケレ」

十一丁オモテ

「哀トテタノマレヌ哉アスハ又 昨日ト今日ノイウルヘケレハ」

十一丁オモテ

(紀友則 古今ヲ撰シヨハラスシテ死タル時読リ 是モ今日ノ

後ニ明日有ト云也)

「昨日ト云今日ト暮シテ明日川 流テハヤキ月日ナリケリ」

十一丁オモテ

「今日モ又命ノ内ニ暮ニケリ 明日モヤ聞ン入相ノ鐘」

十一丁オモテ

「桜木ヲ破テ見レハ花モナシ 花ノ種ヲハ春ソ持タル」

十一丁ウラ

「カタチコソ深山カクレノ朽木ナレ心ハ花ニナサハナラナン」

ケンケイ法師 十九丁ウラ

(眼ニ色ヲ楽フ過也) @以下、三首

「山桜霞ノマヨリホノカニモ 見テモ人コソ恋シカリケン」

(紀) 貫之 二十一丁ウラ

「春霞タナヒク山ノ桜花 ミレトモアカヌ君ニモアル哉」

(紀) 友則 二十一丁ウラ

「ミチノクノアサカノ沼ノ花カツミカツミル人ヲ恋ヤ渡ラン」

読人不知 二十一丁ウラ

(耳ニ聲ヲ楽フ過也) @以下、五種

「音羽山音ニキツツ相坂ノ 関ノコナタ二年ヲフルカナ」

元方 二十一丁ウラ

「初鷹ノワツカニ聲ヲキツシヨリ 半天ニノミ物ヲ思フ哉」

躬恒 二十一丁ウラ

「逢事ハ雲井ハルカニナルカミノ ヲトニキツツ恋渡ル哉」

貫之 二十一丁ウラ

「モロコシノミスシラヌ世ノ人計名ニノミキツテヤミ子トヤ思フ」

定家 二十二丁オモテ

「音ニノミ菊ノ白露ヨルハヲキテヒルハ思ヒニアヘスケヌヘシ」

素性法師 二十二丁オモテ

〔鼻ニ聲ヲ樂フ過也〕@以下、七首

「色ヨリモ香コソアワレトヲホクユレ 誰袖フレシ宿ノ梅ソモ」

古今 二十二丁オモテ

「梅花タチヨル計アリシヨリ人ノトカムル香ニソ染(ソミ)ヌル」

古今 二十二丁オモテ

「散ヌトモ香ヲタニ残セ梅花 恋シキ時ノ思出ニセン」

古今 二十二丁オモテ

「アリシ夜ノ袖ノウツリ香絶ハテク 又逢マテノ形見タニナシ」

古今 二十二丁オモテ

「春ノ夜ノ闇ハアヤナシ梅花 色コソミヘ子香ヤハカクルク」

躬恒 二十二丁オモテ

「梅花誰袖フレシニホヒソト 春ヤムカシノ月ニトハクヤ」

古今 二十二丁オモテ

「五月マツ花橘ノ香ヲカケハ 昔ノ人ノ袖ノ香ソスル」

古今 二十二丁オモテ

「世ノウキメミヘヌ山路ヘ入ンニハ思フ人コソホタシナリケレ」

二十九丁オモテ

〔疏 悪声路ニ盈ト云事〕@以下に七首

「ミチノクニアリト云ナル名取川ナキ名トリテハクルシカリケリ」

二十九丁ウラ

「アヤナクテマタキナキ名ノ立田川 ワタラテヤマンモノナラナクニ」

二十九丁ウラ

「人ハイサ我ハナキ名ノヲシケレハ昔モ今モシラヌトソイワン」

二十九丁ウラ

「コリスマニ又モナキ名ハタチヌヘシ 人ニクカラヌ世ニシスマヘハ」

二十九丁ウラ

「シルトイヘハ枕タニセテ子シモノヲチリナラヌ名ノ空ニ立ラン」

二十九丁ウラ

「吹風ノ下ノ塵ニモアラナクニ サモタチヤスキ我ナキ名哉」

二十九丁ウラ

「無名ソト人ニハイヒテアリヌヘシ心ノトハクイカクコタヘン」

後撰 二十九丁ウラ

「我心カクサハヤトハ思ヘトモ 皆人モシルミナ誰モミル」

三十三丁ウラ

「夏フカキ桜カ下ノ水セキテ 心ノホトヲ風ニミヘヌル」

慈鎮 三十三丁ウラ

「奥山ニタテラマシカハナキサコク舟木モ合ハモミチシテマシ」

後京極 七十丁オモテ

「ウレシサノ涙モ更ニトマラス ナカキ憂世ノ関ノ出トテ」

「ウキモ尚ヲ昔ノ故ト思ハスハ イカニ此世ヲ恨ハテマシ」

「イサキヨクミカク心モクモラ子ハ玉シク四方ノサカヒトソミル」

七十九丁ウラ

「アキラケキ朝日ノカケニアタコ山 雪モ氷モキヘソクタクル」

定家 五十三丁ウラ

「スマサル池ノ心ニアラハレテ 金ノ岸ニ浪ソヨセクル」

卷六 「序品見聞」第四

「止メアヘスムヘモトモトハイワレケリ シカモツレナク過齡
(スクルヨハイ)カ」 一丁オモテ

「大空ノ法ノ雲地ニスム月ノ カキリモシラヌ光トソミル」

定家 五十四丁オモテ

「彼岸ニ此度(タビ) 渡セ法ノ船 生レテ死ヌル古郷ノ川」

「神道ニハ天照大神ハ日天ニテ御座ト云也」 のもと以下の三首

「文殊ヲハ三世ノ佛ノ母トキク 我モ子ナレハ智コソホシケレ」

定家 六十丁ウラ

「唐国ヤ言ノ葉風ノ吹クレハ ヨセテソカヘル和歌ノ浦浪」

定家 六十丁オモテ

「秋ノ夜ノ千夜ヲ一夜ニナスラヘテハ 千夜シ子ハヤアク時ノア
ラン」 六十九丁オモテ

「ウラムナヨ月ト花トヲ詠メテモ ヲシム心ヲ思ステッキ」

定家 六十丁オモテ

「イサキヨクミカク心モクモラ子ハ玉シク四方ノサカヒトソミル」

定家 六十丁オモテ

「アキラケキ朝日ノカケニアタコ山 雪モ氷モキヘソクタクル」

定家 六十丁オモテ

「スマサル池ノ心ニアラハレテ 金ノ岸ニ浪ソヨセクル」

定家 六十丁オモテ

「大空ノ法ノ雲地ニスム月ノ カキリモシラヌ光トソミル」

定家 六十丁オモテ

「彼岸ニ此度(タビ) 渡セ法ノ船 生レテ死ヌル古郷ノ川」

定家 六十丁オモテ

「文殊ヲハ三世ノ佛ノ母トキク 我モ子ナレハ智コソホシケレ」

定家 六十丁オモテ

「唐国ヤ言ノ葉風ノ吹クレハ ヨセテソカヘル和歌ノ浦浪」

定家 六十丁オモテ

「秋ノ夜ノ千夜ヲ一夜ニナスラヘテハ 千夜シ子ハヤアク時ノア
ラン」 六十九丁オモテ

「ウラムナヨ月ト花トヲ詠メテモ ヲシム心ヲ思ステッキ」

定家 六十丁オモテ

「ウキモ尚ヲ昔ノ故ト思ハスハ イカニ此世ヲ恨ハテマシ」

七十九丁ウラ

卷六 「序品見聞」第四

「止メアヘスムヘモトモトハイワレケリ シカモツレナク過齡
(スクルヨハイ)カ」 一丁オモテ

「神道ニハ天照大神ハ日天ニテ御座ト云也」 のもと以下の三首

「我国ハアマテル神ノスヘナレハ日ノ本トシモ云ニソアリケル」

「クモリナキ星ノ光ヲアフキテモアヤマタヌ身ヲナヲソウタカタ」

「月モ星モサヤカニテラスカイモナク此世ノ人ノウワノソラコト」

「サヤカナル鷺ノ高根ノ雲井ヨリ 影ヤハラクル月ヨミノ森」

「白妙ノ天ノ羽衣ツラ子キテ 乙女待トル雲ノカヨイチ」

「クチヲシヤ雲井カクレニスム龍モオモフ人ニハミヘケルモノヲ」

「笛竹ノフシミノ里ハ名ノミシテイツレノ世ニカ子ヲタモツヘキ」

後京極 二丁オモテ

同 二丁オモテ

同 二丁オモテ

西行 二丁オモテ

定家 十六丁オモテ

定家 十六丁オモテ

十七丁オモテ

〔道トヨクナニ尋ヌラン山桜 思ヘハ法ノ花ナラナクニ〕 定家 二十一丁オモテ

〔明ヌルカ竹ノハカセノフシナカラマツ此ノ君ノ千代ソキコユル〕 定家 二十二丁ウラ

〔山フカミナケキコルヲノヲノレノミクルシクマトフ恋ノ道哉〕 定家 二十二丁ウラ

〔キコルヲノトアレハ男ニモナリ斧ニモナル也〕 定家 二十二丁ウラ

〔山フカミハ木コル処也 又末ニマトフト云ハン為也〕 定家 二十二丁ウラ

〔水ノ上ニイカテカ鷺ノ浮フランクカニタニコソ身ハ沈ミヌレ〕 俊成 四十九丁オモテ

〔ウキシツミコン世ニサテモイカニソト 心ニトイテコタヘカ子タル〕 俊成 四十九丁オモテ

〔朝ナキノ舟子ニタニモワスルハヤクカニシツメル秋ノ心ヲ〕 定家 四十九丁ウラ

〔十廻ノ花サク松モクチニケリ 朝カホノミヤハカナカルヘキ〕 後京極 五十三丁ウラ

〔ウケカタキ人ノ姿ニウカヒ出テ コリスヤ誰モ又シツムヘキ〕 後京極 五十三丁ウラ

〔道トヨクナニ尋ヌラン山桜 思ヘハ法ノ花ナラナクニ〕 定家 二十一丁オモテ

〔明ヌルカ竹ノハカセノフシナカラマツ此ノ君ノ千代ソキコユル〕 定家 二十二丁ウラ

〔山フカミナケキコルヲノヲノレノミクルシクマトフ恋ノ道哉〕 定家 二十二丁ウラ

〔キコルヲノトアレハ男ニモナリ斧ニモナル也〕 定家 二十二丁ウラ

〔山フカミハ木コル処也 又末ニマトフト云ハン為也〕 定家 二十二丁ウラ

〔水ノ上ニイカテカ鷺ノ浮フランクカニタニコソ身ハ沈ミヌレ〕 俊成 四十九丁オモテ

〔ウキシツミコン世ニサテモイカニソト 心ニトイテコタヘカ子タル〕 俊成 四十九丁オモテ

〔朝ナキノ舟子ニタニモワスルハヤクカニシツメル秋ノ心ヲ〕 定家 四十九丁ウラ

〔十廻ノ花サク松モクチニケリ 朝カホノミヤハカナカルヘキ〕 後京極 五十三丁ウラ

〔ウケカタキ人ノ姿ニウカヒ出テ コリスヤ誰モ又シツムヘキ〕 後京極 五十三丁ウラ

〔道トヨクナニ尋ヌラン山桜 思ヘハ法ノ花ナラナクニ〕 俊成 二十四丁オモテ

〔チリマカフ花ノニヨイヲ前タテ 光ヲ法ノムシロニソシク〕 西行 二十五丁ウラ

〔花ノカヲツラナル袖ニ吹シメテサトレハ風ノチラヌナリケリ〕 同 二十五丁ウラ

〔心ヲソワリナキ物ト思ヒヌル ミル物カラヤ恋シカルヘキ〕 古今 三十二丁ウラ

〔此ノ世ニハミルヘクモアラヌ光哉 月モ佛ノチカヒナラスハ〕 俊成 三十三丁ウラ

〔東「クルカタヲ西ト聞ケトモケサノ日ノ出ルヨリコソ秋ハ立ケレ〕 俊成 三十三丁ウラ

〔月モ日モ先ツ出ソムル方ナレハアサタフ人ノウチナカメツ 〕 後京極 三十六丁オモテ

〔是ハ東西南北ヲ題ニテヨメル歌也〕 後京極 三十六丁オモテ

〔春霞アツマヨリコソ立ニケレ 浅間ノタケハ雪ケナカラニ〕 後京極 三十六丁オモテ

〔トヲルヘキ道ハサスカニ有ル物ヲシラハヤトタ二人ノヲモハス〕 後京極 三十六丁オモテ

〔厭離穢土ヲ題ニテ〕 @以下、四首

〔濁リエニナヲシモシツムアシノ子ノイトフフシノミシケキ比哉〕 後京極 三十七丁オモテ

卷七 「序品見聞」 別序上

〔東是方始事〕

『法華啓運鈔』覚え書き(渡邊)

五十七丁ウラ

「世ノ中ヲイトフマテコソカタカラメカリノヤトリヲシム君哉」

五十七丁ウラ

「世ヲ厭ヒ木ノモトコトニ立ヨリテウツフシソメノアサノキヌ也」

五十七丁ウラ

「雲モナクナキタルアサノ空ナレヤ イトハレテノミ世ヲスクス
ラン」

五十七丁ウラ

(花ニハ風ヲ厭ヒ 月ニハ雲ヲ厭フ也 成仏ノ初門ニハ先ツ老

病死ヲ厭フ也 江口ノ遊女ノ君ノ返歌ニ)

「世ヲイトフ人トシキケハカリノヤトリニ 心トムナト思フハカ
リソ」

五十七丁ウラ

(法華経ノ信心ニハ謗法ヲ厭フヘキ也)

(天竺ニ暑熱ノ時キ人多ク蓋ヲ持ツ 皆花ヲ以テ之ヲ飾レリ 諸経

ニ花蓋ト云是レ也)

「青柳ヲカタイトヨリテ鶯ノ 縫フテフ笠ハ梅ノ花笠」

催馬楽ノ歌也 五十五丁ウラ

(伊勢物語云 昔シヲトコ梅壺ヨリ雨ニヌレテ人ノマカリ出ヲミテ)

@以下に三首

「鶯ノ花ヲヌフテフ笠モカナ ヌルメル人ニキセテカヘサン」

五十五丁ウラ

「鶯ノ花ヲヌフテフ笠ハイナ ヲモヒヨツケヨホシテカヘサン」

五十五丁ウラ

「鶯ノカサニヌフテフ梅ノ花 ヲリテカザシ老カクルヤト」

五十五丁ウラ

「ヨフコトリウキ世ノ人ヲサソヒテヨ 入於深山思惟佛道」

後京極 六十一丁オモテ

「世ヲ捨テ山ニ入ル人山ニテモ 尚ヲウキ時ハイ□チ行ラン」

六十一丁オモテ

卷八 「序品見聞」別序下

「夜啼ストタ〃モリタテヨ末ノ世ニ 清クサカフル事モコソアレ」

一丁ウラ

(義云 貪欲ノ故ニ散心モ起ル故ニ 此如ク釈也云々 已上)

「春日野ノ若紫ノスリ衣 シノフノミタレカキリシラレス」

二丁ウラ

「ミチノクノシノフモチ摺誰ユヘニ乱レソメニシ我ナラナクニ」

二丁ウラ

「アハレテフ事タニナクハナニヲカハ恋ノ乱レノツカレヲニセン」

二丁ウラ

「カリコモノヲモヒミタレテワレコフト イモシルラメヤ人シツ
ケスハ」

二丁ウラ

(貪愛ノ心アレハ必ス其ノ心乱ル〃物ナレハ乱ヲ除ハ貪蓋ヲ劫

サルトハ尤云ハレタリ)

「サリトモト光リハ残ル世也ケリ 空行月ノ法ノ燈」

後京極 二十二丁ウラ

「ヨソクトクヲノカサマく咲花モ ヒトツ二葉ノ野辺ノ若草」

二十八丁ウラ

「春雨ノアマ子キ御代ヲタノムカナ 霜ニ枯行若葉モラスナ」

二十八丁ウラ

(返返 成仏ノ種子ニハ聞法信心ノ雨ノ潤カ肝要也)

「今マ謂ク 且ク如ク世人ノ苦シキ時ハ 則チ短ヲ以テ長為 楽ノ

時ハ則チ長以短ト為ル 此亦タ情謂ノ之長短也 有人ノ云ク 仏

法ノ食ヲ受クルニ羹ニシテ未ダ飽キザルガ故ナリト 此ノ喩稍通

セリ) @以下に二首

「冬ノ日ヲ春ヨリ長クナス物ハ 恋ツ々暮ス心地也ケリ」

五十丁オモテ

「時鳥ナクヤ五月ノ短夜モ 濁リシヌレハアカシ兼ツ々」

五十丁オモテ

(苦シム時ハ則チ短ヲ以テ長ト為ルノ意也) @以下に二首

「過果ヌイツラ長月名ノミシテ 短カリケル秋ノ程哉」

八条院高倉 五十丁オモテ

「長シトモ思ヒソ果ヌ昔ヨリ 逢人カラノ秋ノ夜ナレハ」

五十丁オモテ

「雲ノ上ニナルヤツ々ミノ瀧ノ水 自カラ法ノ聲キコユナリ」

松月 六十丁オモテ

「音ニ聞ツ々ミノ瀧ヲウチミレハ 只山川ノナルニソ有ケル」

六十丁オモテ

(下和(べんか) 楚山ノ下ニ哭ス 三日三夜泣キ尽シテ之ヲ継クニ

血ヲ以テス云々) @以下に、二首

「血ノ涙ヲチテソ瀧津白川ハ 君カ世マテノ名ニコソ有ケレ」

七十一丁オモテ

「白露ト見ヘシ涙モ年フレハ 唐紅ニウツロヒニケリ」

七十一丁オモテ

(弘四云： 止五二 名利ヲ以テ毒ト為ス云云) @以下に三首

「花ニアカヌ歎キハイツモセシカトモ今日ノ今夜ニ似ル時ハナシ」

七十二丁オモテ

「アカナクニマタキモ月ノカクルカ 山ノ端ニケテイラスモア

ラナシ」

七十二丁ウラ

「秋ノ夜ノ千夜ヲ一夜ニナスラヘテ八千夜モ寝ハヤアク時ノ有ン」

「渡スヘキ数モカキラヌ橋柱 イカニ立テケル誓ヒ成ラン」

俊成 七十二丁ウラ

(：靈山ノ会上ノ諸人 掌ヲ合セ心ヲ一ニシテ之ヲ待テ聞ケト誠テ

渴慕ヲ生セシムル也) @右について二首

「サキヤラヌ日数ナカラモ此花ハ マツニナクサム山桜カナ」

「春ヲ待花ノ匂モ鳥ノ音モ シハシコモレル山ノヨクカナ」

後京極 七十三丁ウラ

〔妙法蓮華ノ匂モ梵音雷震ノ音モ此ノ品ノ時ハシハシコモレル
也云々〕

「クラカリシ雲ハサナカラ晴尽テ 又上モナクスメル空哉」

七十四丁オモテ

〈付言〉

- ① 出来るだけ原文の復元を試みた。
- ② 従って、もともとの歌集との表現の違いもあるかと思われるが、あくまで『法華啓運抄』所引の表現を尊重した。
- ③ 「く」(踊字)は、印刷の都合上、「ッ」と表現した。
- ④ しばしば使用される「子」は、読音としては「ネ」であると思われるが、原文の用語を尊重した。
- ⑤ 参考のため、@を付すなどして、和歌所引に前後する関連の表示を摘記した。